

ルシャナの仏国土 四

第四章 海光る

一. 激突

ホルスの海賊船・ローズナイト号は、物資調達のため、海洋貿易国カレナルド近海の孤島にある母港ターコイズに停泊した。

ここは、いわゆる海賊船基地である。停泊料が少し高いが、他の港では受け入れてもらえぬような船でも接岸することができ、通常物資の調達や船員の雇い入れも可能だ。

その日は、ホルスと羅針盤ジャッカルが交易品や生活物資の買い出しに出て、月刊の船員新聞も買った。海で暮らす者たちのために、世界中のニュースを一ヶ月単位でまとめて伝える新聞である。

「お？アリオーシャ、あいつ即位したのか！嫁さんまで貰いやがった！」

アレクセイの即位と結婚を伝える記事を見つけたホルスは顔を綻ばせた。

「いつぞやお越しになった方ですね。」

「うん。兄上の義理の弟…ってことになるか。てーことは、俺の、どうなるんだ？ああ、しち面倒くせえ！」

彼は髪をぐしゃぐしゃ搔き回した。ややこしいことを考えて頭をフル回転させる時の彼の癖である。

「なら親方、親方の弟さんということにしとけばいいじゃないですか。」

ジャッカルは、ローズナイト号の参謀である。ウユニ人の特殊能力も合わせ持ち、常に冷静沈着に判断を下す。彼のおかげで命拾いしたことが何度もある。

「ま、それもそうか。良い奴みたいだったしな。」

海賊とは名乗っていても、ホルスは無益な殺生や略奪はしない。無国籍の貿易商人と言ったほうが正確であろう。ただ、乗組員は彼自身が道場破りで船の建造費を貯めていく過程で集めてきた者が多く、血の気が多い。時々、一般商船を襲い、剣豪たちと一戦を交わらせたりしてやらないと、彼らの鬱憤が貯まってしまう。それをホルスは『ガス抜き』と名づけている。

「そろそろまた、ガス抜きせんといかん頃かもしれないなあ。」

「それが難点ですね。どうにも収まりがきかない連中ですから。」

羅針盤ジャッカルは、ホルスがウユニに行った時、海に憧れつつもウユニ人で左眼だけが大きく赤くて不気味だからという理由でどの船からも断られていたところをスカウトした。普段は、他の人を驚かせぬように眼帯をしている。

「別に、見た目がどんなだって構わねえじゃねえかよ。海に憧れてるもんはよ！それに、ものは使いようだ。そのウユニの力、俺たちのために使ってもらおうじゃねえか！」

「キャプテン・ホルス！」



ジャッカルは、顔をくしゃくしゃにした。ようやく海に出られるのか！
「おい、泣くんじゃねえ。泣く海賊がどこにいる！しゃんとしとけ！しゃんと！
これから、俺のことは親方と呼べ。わかったな！」

ライオンカ近く航路を航行中のこと、一隻の大型商船が通りかかった。
「じゃ、あれでガス抜きさせてもらうとするか。おい、野郎ども、ガス抜き開始だ！」
「おー！」

船内が沸き立つ。乗組員は戦いの喜びに打ち震えながら、銘々武器を持ち上げ、歓声を上げる。
「いいか！いつも言っとるが、金品は奪うな。女も犯すな。女子供も絶対に攫うな。外道なことをやりやがったら、お前ら全員、海にたたき落としてやるから、そう思え！行くぞ！」
「おー！」

船員たちは一斉に大型商船になだれ込む。

いつもなら、そのまま海賊の圧縮で済むのだが、この時は様子が違った。先に行った乗組員の話では、どうやら一人で海賊たちを押し戻している奴がいるらしい。

ホルスが見に行くと、それはなんと女性警官である。
「なんと！女子(おなご)か！これはますます面白い、俺も相手になってもらおう！」
そうして 真正面から構え合って初めて、ホルスはようやく婦警の剣の色に気づいた。
「おや？その剣は・・・。」

「怯むか！女だと思って侮るな！」
ホルスと、その婦警との戦いが始まった。ホルスとて、ヴィクトル・ルマールの元で佐竹織部から剣を仕込まれ、その後も道場破りで船の建造費を貯めてきた剣豪である。もし剣士試験を真面に受けたら、警察官級剣士クラスだろうと思われる。その彼が、互角に、しかもゆとりなく戦わねばならぬほどの相手は、早々いるものではない。

「お、なかなかやるではないか！」
「この船を守るのが私の務めだ！海賊行為は許さぬ！」
ホルスの腕を以てしても、本当に手強い相手だった。少しでも隙を見せればやられる・・・。
海賊たちも、大型商船の乗組員たちも、二人の戦いを固唾を呑んで見守っていた。

「すげー！あの親方を相手にして、あんなに戦ってる！」
「あんなの見たことない！あの婦警、強いな！」
婦警は、どんどん突っ込んで来る。ホルスは相手の手腕を見定め、自分の闘争本能が満たされると、相手との距離を置き、自らの剣を収めた。

「何故退く?!」
「あんたが、俺にとっては姪のような者だと知れたからさ。」
「姪だと？私は海賊風情に姪呼ばわりされる覚えはない！」
「その剣を持つ者は、自分の教え子だと俺の兄貴が言っていた。つまり、あんたは俺にとっては姪のような者に当たるってこった。さすが兄貴だ、これほど凄い剣士を育ておおせたか。」
「どういうことだ？兄貴とは誰なんだ？」



「俺の名はホルス。いつかまた会おう！」

海賊たちを全員引き上げさせて、彼は去った。

船に帰ってから、彼はしまったと思った。あの婦警もおそらくアレクセイを知っていよう。おめでとうと伝言を頼むのだった…。

大型商船の船長が婦警の元に寄ってきた。

「いやー、お陰様で被害は全くありませんでした。本当にありがとうございます、春野警部。」

その婦警こそ、アイユーブ警察学校で忍びの技を教えていた春野亜矢であった。現在は警部資格を取って任務に当たっている。

この黒い剣を見て、あの海賊は自分の兄貴の教え子だと言った…。

この剣を持つ者…アイユーブ警察学校…。指導員の誰かか、それともファイナ姫…は女性だ。あの男は『兄貴』と言っていたから、姫ではない。あとは、加賀警視正？！

そういえば、警視正は津沢衆から剣術を学んだと言っていた。そういえばあの海賊の太刀筋も津沢衆に通じるものがあつた。この船はこれからライランカに寄港する。上陸したら、尋ねてみよう…。

「うん。ホルスは、いかにも私の弟だ。」

警察学校時代には加賀篤史と名乗っていたクファシル公卿は、あっさり認めた。そうして、以前アレクセイたちに話したこともある自分の生い立ちを亜矢に話して聞かせた。（* 第三章 二. ライブラの記憶 を参照されたし。）

「そうだったのですか。警視正には何か違うものを感じておりましたが。」

「あいつは無国籍を通してはいるからな。しかし、根は良い奴なのだ。時々船を襲うのは、自分や乗組員の闘争本能を満足させるためで、略奪はしない。分かってやって欲しい。」

「そういえば、彼の腕は相当なもの。被害があつてもおかしくなかったのに。むしろ戦うこと自体が目的だったとすれば、それも納得できます。」

「ホルスには、あの似顔絵も渡してある。案外、力になってくれるかもしれん。」

「クファシル公卿殿下…。どうもありがとうございます。」

二. 謎の用心棒

ホルスは、ターコイズの港で燃え残ってボロボロになった船を見た。

「何でえ、こりゃ？これじゃ、海賊船じゃなくて、幽霊船じゃねえか。」

「あーあ、ほんとにえれー目にあつちまった。乗組員たちも全員半殺しで、もう抜けるって奴がほとんどだ。

俺もとうとう年貢の納め時かしんねえ。自分がされてみて、初めて分かる。ひでえことしてきたんだな、俺。…本当に愚かしい悪夢だぜ。」

船主は項垂れた。この船主、実はそれこそ本当の海賊である。思いつだけの悪事を重ねてきていた。この男にとってみれば、ホルスは同じ海賊仲間であり、割と普通に話せる相手だったのだが。



船主の話によると、いつものように商船を襲ったのだが、それが運の尽き。その船にはとてつもない腕の用心棒がいて、逆に押し戻されたばかりか、乗組員たちは半殺し、船にも火を放たれて、命からがらここまで戻って来たというのである。

「ほほう、海賊相手にそこまでやれるとは。なかなかいねえぜ。どんな奴か、一度お目にかかりてえもんだ。」

「冗談じゃねえ！いくらあんたでもあの男は無理だ。やめとけ。」

「で、その船の名は？」

「ボイド・ポセイドン……。ああ、もう思い出すだけで恐ろしいぜ。……」

「ボイド・ポセイドン……。」

ところが、である。そのボイド・ポセイドン号に、数日後にホルスは遭遇した。無論、そのまま通りすぎれば何も起こらないはずだった。

だが、根っからの剣豪のホルスは手強い用心棒と聞けばやり合いたくて仕方がない。乗組員たちにこう言い渡した。

「今回は、俺ひとりで行く。誰も手出しなんねえ。そして、もし俺が負けたら、ジャッカル、お前のテレポートで船ごとターコイズまで飛べ！そのあとはお前に任せる。」

「そんな、ホルス！」妻のノアが泣きそうな顔をする。「やめて！お願い！」

部下たちも口々に止める。しかし火がついた好奇心は止められない。ジャッカルは黙っている。彼は、もしホルスが殺されそうになったら、彼の意に反してでも、強制的に彼を引き上げさせるつもりだったのだ。

ホルスはボイド・ポセイドンに乗り込んだ。当然、自衛警備団が出てくるが、やはりそれでは物足りぬ。彼の目的はただ一つ！

「やい、用心棒！さっさと出てこい！俺はお前とだけ戦いたいんだ！」

最後に出てきた顔を見て、ホルスは驚いた。「お前は？！」

それは、いつかクファシルから渡された似顔絵とよく似た男だったのだ……。

「おい、お前！名は何と言う？言え！」

「うるさいっ！この船の邪魔をする者は許さぬ！」

男は剣を向けてくる。恐ろしいほどの速さだ。並の剣士なら、瞬間的にやられている。

(ん？この太刀筋、どこかで……。そうか、この間の婦警に似ているんだ！)

「おい、名前は何と言う？教えろ！」

その時、横から別の声が答えた。

「海賊さん、その人にはいくら訊いても無駄ですよ。その人は記憶を失っているのです。」

私は、この船の船長です。どうやら貴方の目的はこの人のようですね。他には目もくれない貴方を見込んでお話ししましょう。……アルベルト、刀を退いていいですよ。」

「しかし……。こいつは！」

「おそらく大丈夫です。そうですよね、海賊さん？」

「おう！俺はただ強い奴と戦えりゃ他にゃ興味はねえ。だが、こいつの顔を見て、目的が変わった。こいつを探してる人がいるんだ。貰った似顔絵よりは少し年が行ってるようだが、まず間違いねえ。証拠はその太刀筋だよ。」



しかし、記憶喪失とはなあ……。」

ホルスは剣を鞘に収めた。これ以上は戦わぬという意思表示である。

アルベルトと呼ばれた用心棒は黙っている。代わりに船長が話しかける。

「この人は、十五年ほど前、誰もいない砂浜で倒れているところを、うちの乗組員が見つけて介抱したのです。でも、どうしても自分が誰で、何故そこにいたのかも分からんというので、とりあえずうちの船に乗せてみたら、いや、強い何の。それで、用心棒になって貰ったようなわけで。」

「そうだったのか。それなら、こいつを俺に預けてくれんか？心当たりがある。」

「お前、海賊だろ？信用出来るもんか！俺をこの船から離しておいて襲わんとも限らん。」

用心棒が言った。

「ま、そう思われても無理はねえな。だが、俺は是が非でもお前をある人に引き合わせねばならん。悪いが、少しの間だけ付き合っただけで貰うぜ。いいよな、船長！それとも、この男の記憶を放っておいて、生涯用心棒のままにしておく気かい？そりゃあ、非道ってもんだぜ。」

船長はホルスを見つめた。この海賊、綺麗な目をしている……嘘ではないようだ。

「わかった！連れて行くがいい。」

「船長！」男は動揺した様子だ。

「だが、もしその心当たりというのが違っていたら、必ずこの船に戻してくれ。約束できるか？」

この言葉で、男も船長の真意がわかったらしい。微かだが笑みが浮かんだ。

「ああ、約束しよう。俺はホルス・ジルティガー。俺の名と我が船ローズナイトの名に賭けて、もし人違いだったら必ずこの船に戻す。もっとも、この男は自分の意に反した拘束などすぐに外してしまうだろうがな。

……そういう訳だ。お前の身柄はしばらく俺が預かる。決して危害は加えんし、いつでも帰してやる。だが、もしお前の帰りを待っている者たちがいるとしたら、そのままでは良いはずがねえ。そうだろう？

それでも俺が信用出来ねえっていうんなら、とりあえずの目的地を教えてやろう。ライランカの湖畔宮殿にいるクファシル公卿に会うのさ。」

船長と用心棒は驚いた。ライランカの湖畔宮殿だと？海賊と王室に、どんな繋がりがあるというのだ？！

三. ローズナイト号

ホルスが船に戻ると、すぐさま彼に抱きついてきた者がいる。女房のノアだ。

「ホルス！よかった！もう、心配したのよ！本当に無事でよかった！」

「ノア、心配かけてすまなかったな。だが、今は抱きつくの止めろ。客人在る。」

「あっ！ご、ごめんなさい！あら？……この人……。」

「そうだ。兄上に尋ね人と言われた似顔絵にそっくりなんだよ。船長の許可をもらって連れてきた。記憶喪失なんだってよ。厄介なことになっちゃったが、しょうがねえな。

用心棒さんよ、俺の女房だ。」

「記憶喪失……。」

ノアは、用心棒を見た。



「なんだよ。ジロジロ見るな。それに、さっきからずっと聞いてりゃあ、用心棒用心棒って！俺にもアルベルトって名前があるんだ！」

「だが、そりゃあの船長が付けただけだろう？ま、折角だから、身元が分かるまで、その名前で呼んでやろう、アルベルト。」

「けっ！」

アルベルトは、嫌気がさした。まさか自分が海賊船なんぞに乗るとは思ってもいなかった！

「まず電報打たねえと。こっち来い。」

その途中の廊下に大きな掲示板があった。

「これを見ろ。お前と瓜二つだ。俺がお前を連れて行く理由がこれだ。事のあらまは、あとだ。まずは電報を打つ。」

「これが俺……。」

「ガーゴイル、電報一本頼む。宛先は、ライランカの湖畔宮殿、クファシル殿。

ニガオエノオトコ ミツケタ キオクソウシツ ライランカニツレテイク ホルス、以上。」

「アイアイサー！」

通信士らしき男は言われた通りに電報を打った。

「……話は本当だったんだな。疑って悪かった。」

「まあ、分かってもらえりゃいい。ライランカへは三日ほどかかるな。そのあいだに、俺の昔話を話してやるよ。俺たちが何故そこに行くのかも分かるだろう。」

彼らは操舵室に入った。

「あ、親方！ご無事で！よかったー！」クルーがそう言いながら集まってくる。

「ああ、みんな心配かけて悪かったな。こいつはアルベルト。大事な客人だ。しばらく乗ってもらおう。」

「親方、その人は！似顔絵の人じゃないですか！」

どうやら、この船の全員、あの似顔絵を知っているらしい。それもそうか……。アルベルトは胸をなで下ろす。もちろん油断はならない。だが、だんだんこの海賊の話が本当らしいと思えてきたのである。

ホルスが叫ぶ。

「進路変更！本船はこれよりライランカへ向かう！」

「アイアイサー！」

この船には海賊らしさがあまりない。乗組員はきちんとセーラー襟の海賊服に身を固め、隅々まで掃除が行き届いている。各々が剣を下げている事以外は、まるで一般商船のようだ。

ホルスは彼を船長室に通し、真新しい赤ワインのボトルのコルクをナイフで引き抜いた。

「まず言っとくがな、俺たちは略奪なんてゲスなことには興味ねえ。ただ、時々はものすごく強い奴と戦いたくなるだけよ。そこんところは分かれよな。」

この船の建造費だって、俺が道場破りで貯めた金だ。血で染まった金じゃねえ。」

ホルスは笑った。



「それじゃ、本題といくか。・・・」

昔、ヴィクトル・ルマールという環境設計家があった。彼は、世界各地の孤児院から一人ずつ子供を引き取って、自分の理想のために子供たちに知識と技術を叩き込んだ。世界平和と環境との共存だ。そのうちの一人がマクタバ人の俺。

ホルスは元々の名だが、ルマールという名前じゃ迫力がねえから、ジルティガーにした。強そうだろう？

だけど、マクタバは砂漠の中に点在するオアシス連合国家だ。皇帝も、たまに起きる揉め事の仲裁をするくらいしかすることがない。

もともと船で海に出たかった俺は、道場破りで金を貯めてこの船を作った。国家なんて厄介なものに振り回されたくないから、無国籍でな。

周りからは海賊呼ばわりされてるが、そんなことはどうだっていい。ただ、世界中いろんなところに行って、旨いもん食って、いろんな人と会って、強い奴と戦えれば満足なんだよ。

しかし、俺にも信念がある。非道なことは大嫌いなんだ。醜くて儂いもんだぜ。

ということで、俺には血の繋がらないきょうだいも幾人かいる。ライランカの湖畔宮殿にいるクファシル公卿というの、俺の兄貴だ。もともとは、内密に皇帝の補佐をしながら、オルニアで警察官をやっていたんだが、ライランカの姫さんと結ばれちゃってよ。こっちは驚いたぜ。

お前そっくりの、あの似顔絵も、その兄貴から尋ね人だと言われて渡されたもんだ。詳しいことは知らないが、お前の顔を見て、俺が驚いたのは、そういう訳だ。

それから、滞在する予定の客室に案内するというので、ついて行くと、途中で十歳くらいの男の子に会った。

「馬鹿野郎！俺が許可する以外は上には出てくるなど言っているだろうが！」

ホルスが叱りつけた。

「だって、たまには親方に会いたいんだもん。」

その子が言った。

「おや、この船は子供も乗せるのかい？」

「乗組員たちの家族だ。一緒に暮らさせてやらねえと、男どもが悪さを起こすかも知んねえからな。俺も女房と一緒にだし、自分だけ夫婦で一緒にいるというのも気が引ける。

下には学校もあるぜ。なんたってこの船は由緒正しい船なんだ。子供たちにもそれなりの職に就いて欲しいのさ。

それにしてもバルゴロス、お前は医者になりてえんだろ？俺なんかには会いに来る暇があったら、勉強しろ！勉強！」

ホルスは子供を下へと続く階段へと誘導して、アルベルトに背を向けながら言った。

「ほう、海賊に『由緒正しい』があるのかい？」

「なんとでも言え。・・・しかし、考えてみりゃあ、お前にも似顔絵を配ってまで探している者がいることは確かだ。もしそれが人違いでなかったら、合わせてやりてえなあ。」

「・・・。」

俺を探している奴とは、一体どんな奴なんだろう。そもそも俺は何者なのだ・・・。



四. 滝つぼ

ホルスから電報を受け取ったクファシルは、すぐさま海洋警察ライランカ支庁に飛んだ。支部長に面会を求め、挨拶もそこそこに本題を切り出す。

「実は、かねてから春野君が探している人物が見つかり、船でこちらに向かっているらしい。

忙しいこととは思うが、春野君を今すぐにでもライランカに呼び寄せられないか？一人の途な女性の幸せがかかっている。何とかお願いできぬだろうか？」

「そうですか！あの春野君の希望が遂に叶うのですな！。早速現在位置と予定を調べさせます。」

支部長も、春野亜矢のことはよく知っている。本庁のマーベラス長官からも便宜を図るよう指示されているし、それに王室のお声掛けりもあれば、大っぴらに動いても問題はなかろう。

「しかし、気になるのは、弟が『キオクソウシツ』と打ってきていることだ。再会して、すんなり解決とはいかんかもしれん。」

「そうなんですか。記憶喪失とは、厄介ですな。」

その日、春野亜矢はライランカから直接無線が届くほど近い海域で、商船を護衛してきていた。

ライランカ支庁から無線連絡を受ける。

「春野君か？クファシルだ。聞こえるか？」

「えっ？クファシル公卿殿下？何故この無線を？」

「春野君…落ち着いて聞いてくれ。」

無線機の向こうで、相手がひと呼吸置くのが分かった。

「ホルスから、似顔絵に似た男を見つけたと知らせてきた。ライランカに向かっているようだ。調べてみたら、あと三日ほどで着きそうな位置にいる。

まだ君の許嫁本人かどうかは分からない。だが、君に会わせてやりたい。

いいか、くれぐれも無事にライランカまで来るんだぞ！こういう時に事故は起こりやすい。絶対に来い！

それから…彼はどうやら記憶喪失らしいのだ。覚悟して来るんだ。わかったね？」

さすがの亜矢も言葉を失った。

隼…彼が見つかった？とうとう会えるのか？！だが、記憶喪失だと？！私を忘れていたというのか！

「春野君！気をたしかに持て！こちらに着くまで、とにかく任務を全うすることだけを考えろ！あとは、私が手配しておく。幸運と無事を祈る！以上だ。」

クファシルからの無線は、そこで切れた。亜矢は、その場にへなへたと座り込んでしまった。同僚のマティスが慌てて彼女を支える。

「春野君！」

亜矢を乗せた船は、何事もなくライランカの港に接岸した。隣には見覚えのある黒い帆船が停泊している。これは、このあいだの…？！

「春野君！こっちだ！」

港の中央に、クファシルとホルスが並んで立っていた。

「よお、婦警さん。似顔絵の依頼主がまさかあんただったとはな。…全く奇遇だぜ。」



ホルスが言った。

「貴方は…その節は、クファシル殿下のお身内とは知らず、失礼いたしました。春野亜矢です。」

「良いつてことよ。海賊を取り締まるのは警官として当然のことだ。」

「だが、これからが問題だぜ。これから顔を確認してもらうが、奴は記憶を失くしている。あんたを見ても分かるかどうか…。気をたしかに持って会うんだな。」

「はい。」

亜矢は覚悟を決めて来た。とにかく会わねばならぬ。

「ジャッカル！」

ホルスが、ローズナイト号で待機していたジャッカルを呼んだ。

ジャッカルと共に歩いてくる人物がいた。…

「隼…！」

亜矢は、ゆっくり近づいた。その顔をかめながら、これまでの時間の中を泳ぎながら、目の前まで歩いた。頬に手を当てようとする。

「お前、誰だ？」

男は亜矢の手をよけた。亜矢は手を下ろした。やはり記憶がないのか？私を忘れてしまっているというのか？

「隼…。私はお前の許嫁だ！本当に忘れてしまったのか？！」

「悪いな。覚えてねえんだよ。何もかもが闇の中だ。何か証拠があるのか？」

言葉遣いまで変わっている…。証拠といえば…そうだ！

「隼…右の鎖骨あたり、肩口を見せてみろ。赤アザがあるはずだ。」

彼は、服を肩口だけ脱いだ。そこには彼女が言う通り大きな赤アザがあった。表からは見えないこのアザを、この女は知っている…。

今、俺の目の前で涙を溜めているこの女は、本当に俺の許嫁だというのか…？

「どうやら、間違いはないようだな。」

ホルスが言った。

「アルベルト、お前の本当の名前は、ハヤブサというらしいぜ。この婦警さんは、ずっとお前を探し続けてきたらしい。」

「ま、今すぐに思い出せと言っても無理だろうが、しばらくはそばにいてやれ。」

その男・ハヤブサは、夢見心地で聞いていた。ハヤブサ…それが俺の名？目の前にいるのが許婚？…やはり分からない。だが、彼らは嘘をついてはいない。それだけはわかる。

「春野君、マーベラス長官には、私からすでに一ヶ月間の有給休暇を頼んである。」

「君のことだ、何かしら策を考えてあるのだろう？どんなことでもいい、やってみなさい。」

「クファシル殿下。…それなら、ひとつお願いがございます。私と彼を、オルニアに行かせて下さい。荒療治になるかもしれませんが。」

「しかし、まさか海賊船に婦警さんを乗せてやるわけにはいかねえなあ…。」

ホルスが頭を掻いていると、横にいたジャッカルが口を開いた。

「私がテレポートで飛ばしましょう。正確な地点を教えてください。」



彼らがテレポートされて消えると、クファシルがジャッカルに礼を言った。
「ありがとう。上手くいくといいのだが、」
「きっと上手くいきます。あの人の思いは強い。彼にそれがわからぬはずがありません。たった三日付き合っただけですが、彼は勤が鋭い人です。クファシル殿下、あのお二人は生まれつきの忍び……ですよ？」
「何？」ホルスは驚いた。
「それじゃライブラ兄(にい)、あの二人も織部さんと同じだってえのか?!」
クファシルは答えた。
「ああ。元々『忍び』だということでは同じなんだ。ただ、織部さんとは同じ一族ではないらしい。」
「そうだったのか。俺はてっきりあの婦警さんの剣はライブラ兄の直伝かと思ってたぜ。」
「とんでもない。彼女のほうがはるかに上だよ。今もし真剣に立ち会ったら、僕のほうが負けるだろうな。」
「ライブラ兄……。」

二人は、故郷の村に来た。
「ここが私たちの故郷、坂棚村だ。見覚えはないか？」
「ないな。それよりも、お前の名前を教えろ。呼びようがねえ。」
女は彼を見た。
「そうか、思い出せぬか。ならば、思い出すまで待つてやる。来いっ！」
女は、彼を滝が川に流れ込むところまで引っ張ってきた。そのまま滝の裏へと入っていく。
「ここは……。」
男が辺りを見回すと、そこは小さな洞窟のような空間だった。女は服をかなぐり捨てる。
「な、何をやる?!」
「隼……。本当に覚えておらぬのか！お主はここで私を抱いたのだぞ！」
女はどんどん近づいてくる。男は、思わず後ずさりした。そして、突然目の前の光景が変わり。体がふわっと浮かんた。滝から落ちていく。
「しまった！」女の声が聞こえた。
水の中で、彼の体はもみくちゃになり、回転しながら流されていた。と、その中に浮かんた顔がある。
「かえ……で……」
彼の意識はそこで一旦途絶えた。

目を覚ますと、女が心配そうに自分を見ていた。
「大丈夫か？まさか手練れのお主が流されようとは思わなんだ。許せ。」
「かえで……。」
「隼？お主、今、何と言った?!」
「お前は楓……俺の許婚だ！そうだよな！」
彼女の目から涙が落ちた。
「やっと思いだしたか、この馬鹿！馬鹿！大馬鹿野郎！……」
女は男の胸を幾度も叩いた。涙が止まらない。



「楓……。心配かけたな……。」

隼は、彼女をきつく抱きしめた。生き別れてから、十六年の月日が経っていた……。

五. 月明かりの窓辺で

一時間後、二人は村の長老に会いに行った。長老は代替わりして息子が後を継ぎ、忍びから遠退いて従業員を多く抱える大規模な稲作農家になっていた。今の当主は二人を見ると、たいそう驚き、また懐かしがってくれた。

二人はそこで互いにこれまでの経緯を話し、改めて十六年の月日の長さを感じた。

「それでは、その制服は本物なのだな。」

「はい。紫政帝陛下には、本当にお世話になりました。私と桔梗は今、正式な警察官です。」

彼らと幼馴染みの桔梗は、彼女と同じく警部資格を取ってアイユーブ警察学校で指導官になっている。

「そうか。真っ当な職を得ているのだな。して、隼、そなたはこれから如何に生きていく所存か？また船の用心棒か？それでは二人また離れ離れではないか。」

隼は、少し考えてから答えた。

「私も今楓の話聞いたばかりで、自分の将来のことはまだ決めかねますが、できる限り楓のそばにいてやりとうございます。そのことを優先して生業を決めようかと。」

「隼……。」

楓＝亜矢は、胸を熱くした。やはりこの人は変わってはいなかった……。

「それで、二人とも今日はどうするのだ？よかったら、一晩泊めてやってもよいが。腹も減っておろう。」

「いえ、お気持ちだけで十分でございます。お世話になった方々がライランカで待って下さっているはずですので。」

亜矢は、クファシルとホルスに何かしらの連絡を付けなければならなかった。すべてはそこからなのだ。

それから、二人はオルニアの首都・湯井岡市に来た。忍びの脚では、村から湯井岡市まで二時間もあれば着いてしまう。

「これから、どうするのだ？」

「明禅館に行く。紫政帝陛下には、本当にお世話になった。一時は戸籍係にも置いていただいたことがある。お礼のご挨拶をせねば。」

また、クファシル殿下とホルス殿にも、お主が記憶を取り戻した旨のご報告をせねばならぬ。」

実は、その紫政帝は今この世にはいない。彼は一年前に亡くなり、皇太子だった風馬が、玄洋帝と号して即位している。亜矢が名前を名乗って謁見を求めると、すぐに謁見室に通された。

「亜矢！久しぶりだな！……二人いると聞いて、もしやと思ったが、遂に会えたのだな。本当におめでとう！」

「はい！両陛下のお陰を持ちまして、この度めぐり会うことができました。心より感謝申し上げます。」

亜矢は膝をつき、深々と頭を下げた。隼も彼女に合わせて礼を尽くす。

「そうか。父が生きていたら、さぞかし喜んだことであろう。」

さて、隼とやら、その顔をよく見せてくれ。亜矢は、君をずっと探し続けた。その一途な思いを君は生涯かけて受け止めなければならぬ。君にそれが出来るかな。」



「陛下…。」

その時の隼の顔を、亜矢は生涯忘れまいと思った。強い決意と優しさに満ちた男の顔だった。

「亜矢は、私を待ち続けてくれました。世界中の海を巡ってまで探し続けてくれました。その強い思いは、私にとってかけがえのない宝です。」

私は、彼女との結婚を望みます！」

「隼、よくぞ申した！それでこそ、亜矢が惚れぬいた男よ！この玄洋帝風馬、君たちを心より祝福しよう！」

「陛下…ありがとうございます。」

「そうと決まれば、早速結婚式の支度を整えなければ。」

まずは、隼、君も一般戸籍に入れなければならぬ。名前は、実は父がもう決めてある。烏丸徹…で、どうだ？同じく鳥の名を含み、何事もやり抜く徹底の徹と書く。」

「紫政帝陛下は、そこまでお決めになっていたのですか！」

亜矢は、改めて老帝の懐の深さを思った。その死に間に合わなかったことが心から悔やまれる。

「玄洋帝陛下、ライランカのクファシル殿下にも、お礼とご報告をしたいのです。お電話をお借りできますでしょうか？」

クファシルは、電話口でたいそう喜んでくれた。

「本当におめでとう！ホルスとアリオージャ、レオにも伝えるよ！」

どうやったかは聞かなくてもよいが、こんなに早く記憶を取り戻せたとは。早速結婚式だな！可能なら参列させて貰いたい。」

「ありがとうございます。本当に皆様のお陰でございます。お礼の申し上げようがありません。」

…ファイナ様にもお知らせ致しとうございました…。」

亜矢はまた泣き出しそうになるのを堪えた。

「大丈夫だ、春野君。ファーニャも今、私と共に聞いているよ。私の中にいるのだからな。」

「クファシル殿下…。そうですよね。」

玄洋帝陛下が、式の支度をして下さるそうにございます。殿下におかれましては、どうかそれまでお待ち下さいますよう。」

「わかった。彼にもよろしく伝えてくれ。結婚式の詳細が決まったら、また連絡してくれたまえ。」

久しぶりに聞く、かつての警察学校の校長の言葉遣いであった。クファシル殿下はわざとその言葉遣いをして下さったのだろう、と彼女は思った。

その夜、二人の宿泊室には明禅館内の客間があてがわれた。

「しかし、船に乗って海外を回っていたのでは、道理でいくら探しても見つからぬはずだ。しかも記憶喪失ときている。」

亜矢と徹は浴衣を着て、月明かりの窓辺で寄り添っている。

「本当に苦勞をかけたな。あの当時、俺はウユニの地図を作れという命を受けていた。ところがウユニはその時々に応じて空間構成が変化してしまう。ならばと切り立った崖を登って城に入ろうとしたところ、そこから海に落ちたらしい。」

そこを運良く通りかかって、拾って用心棒にしてくれたのが、ボイド・ポセイドンという商船だったのだ。



ホルス殿は、なんだか強い用心棒がいるというので、挑戦しに来たらしい。だが、俺の顔を見て、心当たりがあるからとライランカに送り届けてくれたのだ。

本当に、出会いというのはありがたいものだ。きっとそれも、お前がずっと俺を探し続けてくれたお陰なのだろうな。

しかし、ウユニに行く前にお前を抱いて、果たしてそれで良かったのだろうか…と、今になって思う。あの時、俺はお前が偵察かなんかに行かされて、もし誰かに身体を奪われでもしたらと思って、まだ初々しかったお前を抱いた…。重荷になってやしなかったか。」

「何を申す、決してそんなことはない！そんなことを考えていたのか、馬鹿！あの日があったから、私はここまで来られたんだ。

隼…いや、徹…これからはずっと一緒だ！離れるでないぞ。」

「そんな台詞は、男に言わせろ。…亜矢、本当に、ずっと一緒にいような。今までの分を取り返すんだ。」

そうして話しているうちに、亜矢の体が重くなった。顔を見ると、いつの間にかすやすや眠っている。

徹は彼女の頬に手を触れた。瑞々しかった肌は柔らかく熟れて年齢を感じさせる。こいつは俺のために方々を探し回った。どんなにか辛かったことだろう…。

それが安心して一気に疲れたんだな。今日はいろいろ有りすぎた。

記憶喪失の俺と会って、村まで帰って、滝に落ちた俺を助け上げて…ん？待てよ。俺が記憶を無くした時と今日、どちらも高いところから水の中に深く沈んで意識が無くなるという点で同じではないか？！

もしかしたら、俺の記憶が戻ったのは、同じ体験、それも命に関わるような臨死体験が起きたせいなのだろうか…。

六. 咲き誇る薔薇たち

亜矢が徹を連れて戸籍課に入ると、かつての同僚たちはどっと二人を取り囲んだ。皆、口々にお祝いの言葉を贈る。そして、手続きの後、彼は正式に『烏丸徹』となった。

「結婚式には、皆を代表して、私が行かせてもらうよ。

烏丸君、君が本当に羨ましいよ。彼女を大切にしてくれ。」

戸籍課の課長・保坂守が言った。亜矢の元上司である。初対面でどんな対応をとったらよいかかわからなかったが、とりあえずは元部下の婚約者ということで良からうと判断した。

「皆様には 彼女がお世話になったそうで…。本当にありがとうございます。」

徹も、その立ち位置でいた。

言葉遣いも、普通の市民と同じになるように心がけている。

それから、オルニア警察宮廷部にも顔を出した。ここには、警察学校の同期生・宮部淳一と小久保美穂がいる。当日は、たまたま二人とも出勤していた。

「遂に会えたのね！ほんとによかった。おめでとう！」

美穂は亜矢に抱きついた。

「式はいつ？」

「まだ決まってないの。昨日こちらに帰って来たばかりなのよ。」



彼らには、徹が記憶喪失だったことなど告げる必要はなからう。

「とにかくよかったな。おめでとう。ところで、それが海洋警察の制服なのか。似合ってるな。

烏丸君、君も警察官になるのかな？ 亜矢さんが惚れ込むくらいだ。きっと腕も立つのだろう？」

「まだ決めていませんが・・・。」

そうだな、それもいいかもしれない、と徹は思った。

淳一が自ら進んで発言したのはそれっきり、相変わらず無口であった。その無口な彼の口から、美穂と結婚していることを聞き出すには多少時間を要した。そして美穂が現在妊娠三ヶ月であることも。

「貴女達も結婚していたのね。おめでとう！ 今まで知らずにいて、ごめんなさいね。赤ちゃんが産まれたら、見に来ていい？」

亜矢は、目の前で照れくさそうにしている淳一と、恥じらっている美穂にお祝いの言葉をかけた。

確かにお似合いだわ、と亜矢は思った。いつか、捨て猫を見つけて懸命に世話をしていた淳一を思い出す。その優しさが美穂を幸せにしていることは、容易に推測できる。

「ところで、君たちの剣は何故黒いんだ？ たしか剣士は白が最高レベルのはずだが。」

また二人きりになった時、徹が尋ねた。

彼は、これからは古い要素が強い忍び言葉や、乱暴な船乗り言葉を封印して、一般的な市民言葉を使い続けようとした。それを亜矢にも宣言すると、彼女もとても喜んだ。

「そうね。貴方もこれからは一般市民なんだもの。それが良いわ。」

彼はまだ警察官級剣士が創設されていることを知らなかったのだ。亜矢は、アイユーブ警察学校のことをより詳しく教えた。

「そうか。忍びの技が使える剣士か・・・。それを君と桔梗とで教えたのだね。

忍びは、もう組織としては存在しないと、昨日、村長(むらおさ)からも聞いた。確かに、最強の剣は、警察官が持っているほうがいいのかもしれない。時代は移り変わるものだな。」

とりあえず明禅館の客間で式までの日々を過ごしていた彼らの元に、クファシルからの封書が届いた。開けてみると、二通の手紙が入っており、クファシルとホルスからのものだった。

「結婚おめでとう。結婚式には行かせてもらおうと思っている。アレクセイも行きたがっているが、二人同時にライランカを留守にするわけにもいきまい。許してくれたまえ。だが、レオには何とか都合をつけさせる。

また、ホルスのことだが、海賊と呼ばれている以上、海洋警察ゆかりの結婚式に姿を見せるわけにはいかぬと言い張って聞かぬ。それなら手紙を書けと説き伏せ、このような形にした。

それでは、結婚式当日に会おう。クファシル」

ホルスの手紙には、こう書いてあった。

「結婚おめでとう。海賊の俺では、二人の晴れ舞台に姿を現すことはかなわないが、心からお二人の幸せを祈っている。ホルス」

(ホルス殿、貴方が一番の恩人なのに・・・。いつかまた会ったらお礼を言います。本当にありがとう！)

徹は、子どもをあやしているホルスを思い浮かべた。



当日、二人の結婚式場になった明禅館の小広間はたくさんの薔薇で飾られた。
結婚式はささやかなものだったが、これまでに二人と縁があった人々が参列している。戸籍課の課長・保坂守もいる。

祝福役は、玄洋帝自らが買って出た。彼も、亜矢の一途さを見守ってきた一人である。

それから、ライランカのクファシル公卿。アイユーブ警察学校の前校長・加賀篤史警視正の今の姿である。
(ファーニャ、春野君の願いが叶ったぞ。君も今、見てくれているね。…)

ライランカ警察本庁所属、レオニード・カンザキ警部。亜矢の警察学校時代の同期生である。当時の名は、神崎リュウ。

海洋警察長官シオン・マーベラス。亜矢の現在の上司だ。彼は亜矢に言った。
「おめでとう。遂に君の苦勞が報われたな。海洋警察に入った時の約束、覚えているだろうね？これからは、本庁で後進の指導に当たってもらいたい。

そして…烏丸君だったね、君を海洋警察にスカウトしたいのだが、どうかね。やってみないか？」
「えっ？僕でもいいんですか？！」徹は驚いた。
「我が海洋警察は、常に優秀な人材を求めている。これまでは多少過剰防衛らしきこともやったらしいが、長いあいだ一般商船を守ってきたのだから？それは功績に値する。

君ならばおそらく筆記試験さえ通れば、少なくとも巡查試験くらいには受かるだろう。受かったら、是非うちに来てくれたまえ。歓迎するよ。」

「マーベラス長官…ありがとうございます。」亜矢が応えた。

「どうする、徹？」

「その筆記試験、受けさせていただきます。彼女と少しでも一緒にいられるのなら。」

即答だった。

大型商船ボイド・ポセイドン号の船長のシャルル・ボワール。徹が記憶喪失になった時、用心棒として雇われていた人物だ。

「あの海賊の話は本当だったようだね。」彼は言った。

「今度会ったら、友として迎えてもいいな。向こうが良ければの話だが。」

今井はるか警部。元の名は桔梗、幼馴染みにして同じ忍び仲間だった。今では、アイユーブ警察学校で教鞭を執っている。彼女もまた、亜矢を抱きしめて喜んだ。

「おめでとう！とうとう願いが叶ったのね。セルジオと滝田警部からも、よろしく伝えて欲しいって。」

「あれ？どうしてセルジオって呼び捨てなの？」

亜矢がわずかに違和感を感じて尋ねると、はるかはクスツと笑った。

「実はね…彼とは婚約しているの。貴女達と同じように、私も今、とっても幸せなのよ。」



玄洋帝が祝福の言葉を述べ、宮部淳一と小久保美穂が、指輪を運んできた。徹と亜矢は、お互いに相手の左手薬指に指輪を差し込んだ。ここに、また一組の幸せな夫婦が誕生したのだ。

七. 臨時同窓会

結婚式のあと、玄洋帝の計らいで会場はそのままアイユーブ警察学校の同窓会の会場となった。かつてのアイユーブ警察学校の関係者が六人、これだけ揃うことはまずないであろう。

「みんな、元気そうで何よりだ。特に、春野君の夢が叶って結婚に至ったことは、誠に喜ばしい。更に今度、宮部君と小久保君のあいだには、子供が産まれるらしい。

本当におめでとう！乾杯！」

クファシルが乾杯の音頭を取った。

「はるか、セロさんと婚約してるって言ったわね？本当なの？」

亜矢が問いただす。そのことは、同じくアイユーブ警察学校に残って指導している滝田光昭にしか伝わっていなかった。

「ええ。でも、みんなに知らせる機会がなくてね。申し訳ありません。」

はるかは謝った。

「しかし、良い機会ができたじゃないか。これで警察学校の卒業生の結婚は私も含めて五組目か。とても感慨深い。

この際、馴れそめを聞かせてくれたまえ。ここにまだ一人独身が残っている。」

クファシルはレオニードの肩をたたきながら言った。

「クファシル殿下、そんな…困ります。」

レオニードは俯いた。

「レオ、君もそろそろ結婚適齢期じゃないか。大いに参考にしたまえ。幸せは多いほうがいい。

今井君も、何かきっかけがあったのだろうか？」

「はい。実は…。」はるかは語り始めた。

はるかは三年間の派出所勤務を終えて、警部資格試験に合格、再びアイユーブ警察学校に指導官として戻った。セルジオ・カルルと滝田光昭が喜んで迎えてくれたことは言うまでもない。始めは、やはり同期生同士の付き合いだった。

それが、およそ半年前、ある日曜日の昼に三人で食事をしようという話になり、街中を歩いていた時のことである。微かな声が聞こえた。

「誰か…助けて…」

声がしたほうに走っていくと、一人の女性が川に流されている。前の晩に降った雨のせいで川は濁り、流れも幾分か速くなっていた。はるかが咄嗟に飛び込み、セルジオと光昭は、たまたまそばの消防用工具箱に入っていたロープを取り出して投げ、流されていく二人を追いかけて走った。

はるかは、女性の体を捕まえてロープを巻きつけた…と、そこまでは記憶にある。



目を覚ましたのは、何故か病院の手術室だ。医師と看護師に名前を呼ばれていた。起き上がろうとすると、後頭部と右脇腹が痛い。

「痛っ！」

「お、気がつきましたか！よかった！」医師が笑顔を見せる。

「意識が戻れば、もうここから出られますからね。」

看護師が優しく声をかけ、彼女をストレッチャーごと運んでいく。灰色の扉を抜けたとき、聞き慣れた声が聞こえた。

「はるか！」

セルジオが横にいた。

「手術は無事に終わりました。あとは快復を待つだけです。」医師が言った。

はるかは病室に運ばれ、セルシオがそのベッドのそばの椅子に腰掛けた。

「ゼロさん……私、どうして……？」

「君は、川で女性にロープを括り付けたあと川岸の流木に後ろから激しく打ちつけられて意識を失ったんだ。たまたま岸边に引っかかったところを、タキさんと僕で引き上げて、女性と君を救急車に乗せて、ここに運んでもらった。君は脳振とうを起こし、右脇腹に木が刺さって緊急手術したんだ。」

「そうだったの。それで、あの人は？」

「無事だ。少し水を飲んだらしいが、かすり傷一つなかったそうだ。」

「良かった……。」

「まあ、な。でも、君が緊急手術だろ？心配したよ。」

「だけど私、しくじったのね……。怪我して意識を失うなんて。」

「今井君……。君は人を助けたんだ。名誉の負傷だよ。」

それから、君に一つ謝らねばならないことがある。家族でなければ付添はできませんと言われ……。僕は君の婚約者だと言ってしまった。」

「えっ？どうして……？私、一人でも平気なのに。貴方だって知ってるでしょ。」

セルジオは、彼女を見つめた。

「ゼロさん？」

彼は、思い切って言葉を吐き出したようにみえた。

「君のことが放っておけなかった。助け上げたとき、君の体は軽かった。そのとき僕は、君が女性だということに気が付いてしまったんだ。眠っている時の君を見たら、とても帰ることなんてできなかった……。はるか、僕の婚約者になってくれ！」

セルジオは、彼女の左手を取って、薬指に口づけた。それは、オルニアにおいては婚約の証だった。

はるかは驚いた。

「ゼロさん、むやみにそんなことしちゃいけないわ。」

「むやみじゃない。僕は君を愛してるんだ！これからは名前と呼んでくれ。」

彼は、さらに指を絡めた。



それからセルジオは、彼女が退院するまで毎日、仕事帰りに通い続けた。彼女の怪我は完治まで一ヶ月を要するものだった。

(彼はただ怪我人の私を励ましてくれているだけなのよね。でも、それでもいい、今だけでも甘えていたい……。)

いつしか、はるかはそんなふうになるようになっていた。彼に手を触れられていると心が温まるのだ。

もちろん光昭も見舞いに来てくれるが、セルジオの時とは明らかに何かが違う。

「セルジオは、本当に君を心配している。あれは本気だ。」

光昭にもそう言われた。光昭自身は、あの当時から妻子持ちだった。既婚者だからこそ分かる勤がある。

「でも、まさか。」その時のはるかは本気にしていなかった。

そして、退院を一週間後に控えた頃には、もうほぼ傷も癒えていた。

セルジオが現れる時間に、彼女はわざと屋上庭園に行った。できればそのままやり過ごすか、他に人がいない場所ではっきり断ろうと考えたのだ。

しばらくすると、セルジオが彼女を探してやって来た。

「ここにいたのか。」

彼は近づこうとする。彼女は距離を置く。

「はるか？ どうした？」

「セロさん、私、もう大丈夫だから……。もう恋人の振りしなくていいから……。元に戻りましょ。」

彼女は後ろを向いた。涙を見せまいとしたのだ。後ろから、彼の声が聞こえる。ゆっくりとした声だ。

「はるか、僕は本気だ。愛してるんだ！ 君が動けないうちに告白するのは、男として卑怯だと思い、愛の言葉や口づけは控えてきたけれど、君もわかってくれていると思っていた。意外だったよ。君でさえも自分のことはわからないんだね。」

「お願いだ、こっちを向いてくれ。近づくの許してくれ。はるか、愛してる！」

「セルジオ……。」

まるで籠が外れかのように、はるかの心はセルジオに流れていった。彼女は振り返った。一瞬で抱きしめられ、唇を奪われた。彼が、再び自分の左手薬指に口づけするのもそのまま許した。

「私で、良いのね……。」

「君じゃなければ嫌だ。」

彼の胸は温かかった。

...

「感想はどうだ？」

話にすっかり聞き入っていたレオニードは不意を突かれた。クファシルだった。

「誰しものが通る道だ。君も自分一人のことを考えてくれ。止めはせん。」

「加賀警視正……。」

八. 閉ざされた藍色



「僕には恋することが遠く感じられてならないのです。結婚することが怖い……。」

レオニードは、うつむき加減で話し出した。二人はあのあと、レオニードの両親に会いに行き、今はライランカに帰る船のデッキで潮風に吹かれている。

「両親にも、お前いつ結婚するんだと言われましたが、僕には人を幸せにする自信がないのです。」

ライランカ人と結婚しても、僕はきっと相手の髪を見て、昔のつらさを思い出してしまうでしょう。そうかといって、もし他国の人と結ばれたら、また混血児が産まれる……僕は自分の子供にまた同じ苦しみ悲しみを味あわせたくないのです。

僕を産んでくれた両親には、とてもこんなことは言えません。」

クファシルは黙って聞いていた。そうか、君はそんなことを考えていたのか。手ばかりだったな……。

「みんな、僕を追い越していきます。子供の頃からそうでした。いつの間にか友達同士で食事していたり、旅行していたり、僕が知らない人と愛を交らせていたり、普通に生活している。それぞれに姿を変えていきます。」

だけど、僕には何故かその普通の生活ができないまま、月日だけが過ぎていくのです。

混血児だからとひねくれるのも大人げないし、僕は僕なりに誇りを持って生きてきました。でも、やはり過去は捨てきれずに追いかけて来る。みんなを見ているのがつらい時もあります。

警視正もファイナ様も、僕には分け隔てなく接して下さいました。また永遠に目上の方でもあります。だから、お話ししています。」

レオニードは、船に切り裂かれ大きくなっては消えていく波のうねりを見ていた。

クファシルが口を開く。

「そうだったのか。今までそこまで考えが及ばず、すまなかった。話してもらえて嬉しいよ。それだけ信じてもらっているということだからね。」

それにしても、普通の生活というのは一体何だろうね。

私だって、ファイナを愛するようにならなかつたら、何事もなくそのままオルニア警察の制服を着続けて生きていくつもりだった。君たちの卒業式の朝、私は万感の思いで袖を通したものだ。しかし、悔いはなかった。

人を愛するということは、全てを超えることなのだ。君にも、そのうちに分かる時が来る。何故なら君も今井君の話に引き込まれていたのだからね。」

ライランカに帰ったレオニードは、アレクセイの勧めで警視資格試験を受け合格、それを機に本庁宮廷警護課に課長補佐として転属になった。

「これからは、ここで後進の指導に当たってくれ。また、時々僕と立ち会うことで、一層の効果が期待できるだろう。それに、僕ももっと君と話したいしな。やっと念願が叶うよ。」

アレクセイはそう言ったが、実はこれには他に二つの意図が隠されていた。アレクセイとレオニード、二人の友情で孤独を緩めることと、レオニードの嫁探しのためだ。警護官になれば、王族の警護であちこちに行くことになる。つまり、派出所にいるよりはずっと行動範囲が広がるのだ。

レオニードが宮殿内の護衛警官詰め所に赴任して来ると、警護官たちは次々と彼に打ち合いを申し込んできた。

「是非ともお願いします、レオニード警視。」

(警視、か……懐かしい役職名だ。)



アイユーブ警察学校においては、警視といえばソフィア警視…ファイナ姫のことだった。これからは自分がそう呼ばれるのかと思うと、誇らしい反面で気恥ずかしくもあった。

転属して二カ月ほど後のことだ。アルティオ上帝の護衛で、彼は栽培技術研究所に同行した。極北のライランカにおいては農業栽培研究も重要課題である。

「ここは、各国からの帰化人も多い。これはと思った者を招いて来てもらっている。途中帰化の者は、みな顔見知りだ。」

アルティオが言った。レオニードたちがそうであったように、途中帰化するには皇帝直々の許可を必要とする。その時に帰化する者たちは全て皇帝と面会することになるのだ。

そのうちに何だか懐かしい香りが漂ってきた。

「上帝陛下、こちらをどうぞ。アップルティーでございます。」

一人の女性がティーセットを持って来た。アルティオとレオニード、随行した農林局次長、もう一人の護衛官に茶を配る。

「ああ、懐かしい香りだ…。」

レオニードが思わず漏らした言葉が聞こえたらしい。その女性が彼に声をかけた。

「あら、貴方も帰化された方なのですか？」

「はい。そうなんです。オルニアの籠野市出身なんですよ。」

「あら、私も同じです。」

「そうですか！」

彼は、懐かしさでいっぱいになった。

「ここは、本当に良いところです。でも、この国は閉ざされてもいますね…。」

彼女は他の人には聞こえないように言った。

「幼い頃、近所にオルニア人とライランカ人のご夫婦がいらして、お二人のあいだにはお子様がいらっしやいましたが、髪が緑色で、お友達も少ないようでした。ライランカの方々はあまり国外にはいませんから…。寂しかったんじゃないかと、今でも思います。たしかその子、リュウ君、って言ったかしら。」

「えっ？！それ、僕です！」

「えっ？貴方、リュウ君？」

「僕の元の名前は神崎リュウ。貴女のお名前は？」

「私、歩(あゆみ)よ！吉川歩！まさかりュウ君だなんて。」

「なんだか話が弾んでいるようだね。知り合いかな？」

アルティオが二人の会話を聞きつけた。

「あ、上帝陛下！申し訳ございません。どうやら彼女は僕の幼友達のようなです。」

「そうかそうか。それならばしばらく話していなさい。私は、他の部署を回ってくるから。」

「は、ありがとうございます！」

彼は敬礼した。アルティオは他の人たちと他の部屋に移動していった。



「驚いたよ、歩ちゃんがライランカ人になっていたなんて。」

「私も。あなたも帰化していたのね。あ、私の今の名前はエカテリナ・キツカワ、愛称はカーチャね。」

「僕はレオニード・カンザキ。レオって呼ばれてる。見ての通り、宮廷警護官だ。オルニアの警察学校でたまたまファイナ様と出会って、連れてきていただいたんだ。」

本当に懐かしいな。君はどうして帰化したの？」

「私は、家族ごと招かれたの。リュウ君、覚えてるかなあ、うちの父が林檎栽培の研究者だったこと。」

「そういえば、君のお父さんは何かの学者さんだったような……。それでか。」

彼女とは、家が近所でよく遊んでいた。彼が十歳頃、彼女の家族はどこかに引っ越して行ってしまった。当時の彼には行き先が判らなかったが、まさかライランカだったとは……。

「うん。それにしても懐かしいな。今度、遊びに来て。父と母もきっと喜ぶわ。住所はここ。」

彼女は紙に住所をメモして渡した。

「どうもありがとう。それじゃ、今度の非番が土曜日なんだ。昼過ぎに行っていいいかな？」

九. 頭もたげる獅子

約束の土曜日、レオニードは、エカテリナのメモを頼りに彼女の家を訪れた。

先方では、彼女とその両親、弟のイリヤが待っていた。

「こんにちは。レオニード・カンザキです。」

「こんにちは。ようこそ。エカテリナの父、エヴゲーニーです。娘から聞いて驚きました。まずは中へ。」

彼女の父親らしき人物が出迎える。家の中には、オルニア料理の香りが漂う。おそらく彼のために用意をしているのであろう。

「リュウ君、大きくなったね。君のことは覚えているよ。ご両親はご健在かね？」

「はい。お蔭様で二人ともまだ警官として働いております。」

「それは何より。お父さんとは、散歩の時によくお会いしていたからね。もっとも、君のお父さんはパトロール中だったが。親の職業を継ぐなんて、君は親孝行だね。それに引きかえ、うちの子は……。」

「お父さん！」

部屋に入ってきたのはエカテリナだ。

「リュウ君は、久しぶりに来てくれたのよ。いきなり愚痴を聞かせるなんて！リュウ君、ごめんなさい。父は、この頃こうなのよ。」

「いや、かえって仲が良い証拠ですよ。僕も、むやみに帰ったりすると怒られます。だから、手紙を書くんです。」

「君のお父さんは厳しそうだったからな。今でも顔が思い浮かぶ。でも、それだけに優秀なのだろうね。」

そこへ、母親のマリアと弟のイリヤも入って、いろいろ懐かしい話をした。そして、お互いに何故ライランカに帰化してきたのかも。

「そうすると、君はアレクセイ帝陛下とも親しいという訳か。」

「そうですね。友達づきあいをさせていただいてます。そのために呼ばれたようなものですから。とても気さくな方ですよ。」



レオニードは、少し不思議に思った。彼女のお父さんは、やけに話しかけてくるけど、学者なのに元からこんなに話好きなのだろうか……。

それに、肝心のエカテリナは、不思議なことに初めは話に加わっていたものの、だんだん奥に引っ込んであまり出てこなくなった。

彼が不思議そうな顔をしたのを認めたのであろう、エヴゲーニーが急に声を潜めてこう言った。「……実は、カーチャは一度乱暴されたことがあるんだ。それ以来、男を怖がるようになってしまった。幼なじみとはいえ初対面の男に、よく住所を教えたものだと思っていたが、今日いろいろ話してみても理由がなんとなくわかったような気がするよ。」

君には包容力や冷静さを感じる。また、君もどこか恋愛を怖がっているようなところがあるね。あの子は、自分と同じものを君にも見つけたのではないか、と思う。」

「彼女が……。」

レオニードは愕然とした。上帝たちに茶をふるまったあの時の彼女は明るくて、とてもそんなふうには見えなかったのだ。

「もしよかったら、娘と付き合い合ってやってはもらえないだろうか。君はどうやら頼りになる男のようだ。」

レオニードは、しばらく考えて答えた。

「僕で良ければ、お付き合いさせていただきたいと思っています。今日も、半ばそのつもりで来ました。」

でも、それにはまず彼女自身の気持ちを確かめてからでなければなりません。今伺ったお話のあとでは尚更です。」

「立ち聞きはいけませんよ、カーチャ。」母親の声が聞こえた。レオニードとエヴゲーニーは一瞬凍りついた。

エカテリナが母親に付き添われて入ってきた。

「カーチャ、お前、今の話を……。」

エカテリナは、かすれた声で言った。「聞いたわ……。」

「でもお父さん、お父さんの言った通りなの。私、彼なら愛することができるかもしれない、って思ったの。あの事件の前からのお友達だから。それに、頼れそうなところがある。」

「カーチャ……。」

エヴゲーニーは娘を抱きしめた。

「カーチャ、僕で良いんだね？」

レオニードが言った。彼女は、父親から離れて頷いた。

「慌てることはない。ゆっくり行こう。まずは、僕をレオと呼ぶところからだ。それから、僕は非番の日ここに来る。それ以外は手紙の交換。いいね？」

「うん。」

彼女は、少し笑顔を見せた。

家を出たところで、彼はイリヤに呼び止められた。

「レオニードさん……。姉のこと、どうかよろしく願います。それが言いたくて。」



イリヤは深々と頭を下げた。

「まー君、いやーイリヤ、僕は自分の意思で君のお姉さんとのお付き合いを決めたんだ。それ以外はないよ。でも、この恋はきっと成就させてみせる。僕を信じてくれ。それから、僕のことは、レオって呼んでくれていい。」

もはや彼に迷いはなかった。彼女を幸せにしたい…それしかなかったのだ。

(ただ、手順をひとつでも間違えたら取り返しがつかなくなる。慎重にいかなくては。)

十. 飛び立て！

海洋警察の本部は、海洋貿易国・カレナルドの港湾都市ポルテアスルにある。

亜矢と徹は、ポルテアスル市内に新居を構えた。賃貸アパートメントの一室だ。この国では、都市部に暮らす者はほとんどがアパートメント暮らしである。それが一般的なのだ。

徹は、しばらくのあいだ警察官試験の勉強に専念することになった。

ももとは忍びである。大概のことはすぐに習得できるはずだが、法律についての知識となると、一筋縄ではない。

「私だって、警察学校でかなり厳しくやられて、一年かかったんだから。覚悟しときなさいよ。」

亜矢は笑った。目の前には、最愛の人がいる。幸せいっぱいだった。

「でも、それは一度に警部レベルまで教えていただいたからみただけだね。巡査だからって侮っちゃ駄目。満点を取る気でやらないと通らないから。…もともとこれは、ファイナ様からの受け売りなのだけれど。」

「ファイナ様って、どんな方だったんだ？お顔は知ってたけど。」

徹も忍びとして各国要人の顔は頭の中に入れてはいたが、実際に会ったことなどなかった。

「そうね。法律学の講義の時は厳しくて、週末テストで良い点を取らないと、日曜日の自由時間は無しで居残りだった。今から考えると、その厳しさも、訓練生みんなが筆記試験では困らないようにわざと作られた厳しさだったのね。」

でも、それ以外の時間は気さくに話しかけて下さった。他の訓練生は身元を知らないから、当たり前だったかもしれないけど、私と桔梗にはとても優しい方だと思えた。

本当に惜しい方をなくしたわ。当時の校長だった今のクファシル殿下とも愛し合っておられてね。お幸せそうには見えたけれど、きっとお命の短いことには悲しまれていたと思う。クファシル殿下は、その悲しみをすべて受け止めて癒されていたに違いないわ。私たちは、そのファイナ様とクファシル殿下の教え子。そう思うと、また胸が熱くなってくる。」

亜矢は温かかったファイナを偲ぶ。

「だから、貴方も試験は一発合格して。それから先もあるんだからね。」

「先？警部にかい？」

「そう。巡査で三年の実地勤務のあと、初めて警部の資格資格が受けられる。警部になると、指導官にもなれる。それが当面の目標ね。」

「ずいぶん先の長い目標だね。だけど、頑張ってみるよ。でないと、恩人たちに申し訳が立たない。」



徹はその年、国際剣術認定試験を受けて、警察官級剣士の資格を取得した。そのとき試験官になったのは、警視になったばかりのセルジオだ。

(さあ、かかってきたまえ。君が春野君を幸せにできる男かどうか見てあげよう！)

(ここで負ける訳にはいかぬ。亜矢のためにも！数多くの恩人たちのためにも！)

本当に激しい戦いだっただ。素人ではとてもではないが見ていることさえ追いつかない速さで打ち合う。少しでも隙を見せたほうが負ける・・・互いに強く感じた。やがて、相手の手腕を見極めたセルジオは木刀を収めて、審判員たちに彼の腕を保証した。

試合後、控え室に戻ると、セルジオが徹に話しかけた。

「先程は失礼した。さすがは春野君の旦那様だ。」

徹は驚いた。亜矢は、どこまで顔が広いのだ。

「亜矢をご存じなのですか？」

「私は、セルジオ・カルル。アイユーブ警察学校で春野君と同期だった者です。実を言えば、剣術試験において現時点で『警察官級剣士』の試験官を務められる者は、我々の同期生しかいないのです。貴方のことも知っていました。更に私は、今井はるか＝桔梗の婚約者です。」

「では、貴方が桔梗の婚約者でしたか。お話は伺いました。どうか、桔梗のこと、よろしくお願い致します。彼女にも、どうかよろしくお伝えください。」

二人は固く握手を交わした。

「できれば、今後は友になっていただきたいが・・・。」

「それはもう、喜んで！」

そして、彼は晴れて黒い剣を下げることを許された。

しかしこの日は、黒い剣は用意されておらず、とりあえず白い剣が授与された。

玄洋帝から黒い剣の製作依頼を受けた科学者・周公沢は、嬉しそうに困って見せた。

「また作るんですかいな。まあ、今回は一本だけやさかい、わしにもまだ作れますやろうけど。今後は章英に引き継いでもらうしかありまへんな。」

それにしてもさすがに亜矢はんの旦那はんや。そりゃもう、わしも精魂込めて作らしてもらいますよってに。」

更に九月、徹は巡査資格試験にも合格した。海洋警察本庁で行われた任命式で、徹の制服姿を見た亜矢は感動して涙ぐんだ。

「君は、いつからそんなに泣き虫になったんだい、警部殿？」

その夜、徹は笑って彼女のおでこを突ついた。

「いつぞやの時は、本当に殺されるかと思ったよ。」

「もうっ、いじわる・・・。」

言葉とは裏腹に、亜矢は改めて彼の大きさに引き込まれていく自分を感じ取っていた。

間もなく彼の最初の護衛任務が知らされた。



「なんだって?! ボイド・ポセイドン号?」

彼は、指導役のヨセフ・ヤン警部、先輩のメイプル・ジョンソン巡査と共にボイド・ポセイドン号に向かった。船長シャルル・ポワールは、笑顔で彼らを迎えた。

「いやー、よく来て下さいました。この船はこれまで、自警団で守ってきましたが、これからはあなた方海洋警察に護衛をお願いすることにいたしました。今後ともどうかよろしくお願い致します。」

他の二人の手前、船長はこう挨拶をしたが、数時間後に徹と二人きりになる機会ができると、彼は親しげな笑顔を見せた。

「久しぶりだね。とにかく元気そうでよかった。その制服姿も似合っているよ。君が海洋警察官になったあかつきには、初めての護衛任務は是非うちにと、マーベラス長官をお願いしておいたのだ。」

「ああ、それで…。初めての警護船がこの船だと知った時は驚きましたよ。そういうことだったのですね。ありがとうございます、船長。船長から受けたご恩は生涯忘れません。また、我々の結婚式にも来ていただきたい。」

「いやいや、乗組員だった君が本当に幸せになったかどうかを見届ける義務も私にはあったからね。」

それに、その時にマーベラス長官の知己を得たことも、有意義だった。」

「しかし、自警団のみんなは、どうしました? 姿が見えませんが、もうこの船にはいないのですか?」

「うん。皆には君と同じ道に進んでもらうことにしたんだ。今頃は、海洋警察の訓練所でしごかれてるんじゃないか。」

シャルル船長は、ほくそ笑んだ。

「そうだったのですか…。でも何故? そのままでもよかったはずでは?」

「私ももう若くない。後を継ぐ子もない。この船は、いつまでもこのままというわけにはいかないのだ。」

そうしたら、皆の生活は誰が面倒を見るのか、とってな。海洋警察なら、生活は安定する。

君が良い手本になってくれたのだよ、烏丸君。」

最初の任務を終えて帰った彼に、亜矢は自分が身ごもっていることを告げた。四カ月だった。

一一. 薔薇の花束

次にレオニードがエカテリナの家を訪れたのは、次の土曜日の昼頃だ。扉越しに声をかける。

「カーチャ! レオニードだ。開けてくれ。」

「ほら、リュウ君よ。貴女が出てあげなさい。」

マリアが彼女を玄関に追いやった。実は家族でエカテリナには内緒で、いくつか取り決めをしていた。エカテリナが彼を『レオ』と呼ぶようになるまで、家族もそれに合わせようというのも、そのひとつだった。

彼女は、ひと呼吸おいてから思い切って扉を開けた。レオニードがピンク色の薔薇の花束を持って立っている。

「カーチャ、ごめん。女の人に何をあげたらいいか、さっぱりわからなくて…。これ。」

彼は照れくさそうに笑った。

「そうお? これでいいと思うけど…。嬉しいわ。どうもありがとう!」



エカテリナは、本当に嬉しそうにピンク色の花束を受け取った。大きくはないが、それでいて密やかな華やかさがあるその花束は、彼の心遣いそのもののように思えた。

「僕はだいたい週末は来られると思うけど、臨時で変わることがある。だから、来られる日も時間だけは揃えたいと思うんだ。君の仕事の都合も考えると、だいたい今くらいで良いかな？」

彼は言った。時刻はおおよそ午後二時頃だ。

「いいんじゃない？」

彼女は、気楽に答えた。

居間には、エヴゲーニーとイリヤもいて、彼が入っていくと、まず父親がこう言った。

「やあ、ようこそ、リュウ君。」

家族でも話したのだが、君はカーチャの友達だ。私も君の子供の頃のことを覚えている。だから、この家では君には家族としてくつろいで貰うことにした。言葉も丁寧語は禁止だ。それでいいかね？」

エヴゲーニーは親しげに微笑んだ。

「え、いいんですか？」

「もちろんだとも。これは、カーチャも承知している。そうだね？」

「はい、お父さん。」

父親が彼女をどう説き伏せたかはわからないが、レオニードにとっても、それは有難い提案だった。

「それじゃ、そうさせてもらおうかな。」

お茶とお菓子をご馳走になりながら、彼は話し始める。

「僕はこれまで、いろいろな愛を見てきた。結婚までに短くて数ヶ月しかなかった例や、十数年かかって許嫁を探し続けて結ばれた人もいる。これからしばらくはそんな話をしていきたいと思っている。」

彼はそう前置きしてから、最初にファイーナとクファシルの物語から話し始めた。

クファシルには予め許可を取ってあった。詳細は伏せたが、やはりそこは元警視正である。おそらく即座に彼女ができたのだと見破られていることであろう。

…ここでは詳細は割愛して、レオニードが締めくくった言葉のみを述べておく。…

「クファシル殿下は、自ら警視正の職を辞されてまでも、ファイーナ様という余命いくばくもない女性を愛された。

限られた時間の中で大きく育まれた愛がある。その様子をずっとお二人のお側近くで見ることができた者は少ない。僕もその一人だ。

あるひとつの愛の時間は限られていても、その愛がまた多くの愛を生んでいくことがあるのだね。僕が君と出会ったのも、広く見ればそのひとつなんだ。」

レオニードはそこで一つ目の話を終えた。

そう、彼がこの国に来なければ、私も彼には会えなかったんだわ、とエカテリナも思った。

「確かにそうだわ。だけど、貴方は何故まだ独り身なの？今まで周りに女性はたくさんいたでしょう？」



その時にはすでに、家族は気を利かせて席を外していた。果実酒が入れられたクミナ茶の香りが仄かに漂う。レオニードは、彼女を見つめながら言った。

「実を言うとね、カーチャ……。僕は結婚するのが怖かったんだ。女の人を抱きしめたりする自信がなかった。

君も知っているように、オルニアにいた頃の僕は明らかな混血児だった。みんなからは異形として扱われてきたんだ。その、なんとなく遠ざけられてきた理由が、僕の心がどこかおかしかったせいじゃなくて、単に混血児だからだとわかって、僕は却ってほっとしたくらいさ。

だから、今までは結婚すること自体が怖かった。ライランカの人と恋をすれば、その髪の毛の藍色を見るたびに子供の頃の自分を思い出すかもしれない。かといってオルニアの人を愛したら、また自分の子供が混血児になってしまう。どっちつかずだったんだ……。

こんなことを話したのは、君で二人目だ。一人目は、今の話に出たクファシル殿下なんだけどね。あの方は永遠に目上の立場だから冷静に見て下さる。」

それは、エカテリナにとって、思ってもいなかった理由だった。異形だなんて、そんな！

「……リュウ君……。」

「だけど君となら……子供の頃の僕をよく知っている君となら、恋ができるかもしれないと思ってる。そして僕は今、君の前にいるんだ。」

彼はそう言い残して帰っていった。

自室に戻ったエカテリナは、花束からほどかれて花瓶に挿された薔薇の花々を見つめた。彼の顔が目には焼きついて離れない。

子供の頃の彼の髪は、ただ綺麗だとしか思っていなかった。彼自身が、そのために孤独に耐えていたなんて、考えもしなかった。確かに友達が少ないのは知っていたけれど……。

ピンク色の薔薇の花言葉……彼女は、本をめくって調べた。

「しとやか」「上品」「可愛い人」「美しい少女」「愛の誓い」

「愛の誓い」……この言葉を見つけたとき、彼女は胸が押しつぶされそうだった。彼は、彼女に指一本触れることなく、愛を誓ってくれていたのだろうか……。

(リュウ君……レオ！)

その夜、彼女はベッドの中で体を丸くして泣いた。何かがこみ上げてきてたまらなかった。

一二. 逆光

湖畔宮殿の『合歓の間』は、譲位後のアルティオの居室である。アレクセイが呼ばれていた。

「つかぬことを訊く。レオの結婚について、お前は何か聞いていないか？」

アルティオの質問に、アレクセイは一瞬首をかしげたが、思い当たる節がないわけでもない。

「レオですか……。そういえば、兄上からこんな話を聞きました。レオがこのあいだ兄上と姉上のことを一人の女性にだけ話してもよいかどうか、承諾を得に来たというのです。兄上は、きっと彼女ができたのだろうと言っていました。」



「そうか、クファシルのところへなあ。ならば、私がもはや口利きをするまでもなさそうだな。」

「どういうことなんですか？僕にはさっぱり…。」

「無理もない。お前は事情を知らぬのだからな。」

先だって栽培技術研究所に行った時に、レオに警護して貰ったのだが、その際、偶然にもそこに幼友達がいらしい。女の子だったから、もしかしたらと思って、お前に尋ねてみたのだ。」

「そうでしたか。彼は慎重な男です。彼女ができたからといって、すぐに手を出すようなことはしません。おそらく婚約が本決まりになるまで僕たちにも話さんでしょう。それまで待ってやってください。」

次の土曜日、エカテリナは、家の中ではなく、玄関脇に設えてある小さな腰掛けに座って彼を待っていた。訪ねてきたレオニードは、少し驚いたが、彼らしく冷静に声をかけた。

「やあ、カーチャ！」

彼女は振り向いて彼の顔をじっと見つめる。見つめながら、彼に近づいた。

「カーチャ…どうした？」

彼女は、彼の胸に薔薇の花が挿してあるのを見つけた。

「レオ、このピンク色の薔薇、花言葉を知って付けてるの？」

彼は、優しく笑った。

「もちろんだ。『愛の誓い』、この言葉を君に贈るためさ。…君はきっと気づいてくれると思っていた。」

「レオ…。」

彼女は、もっと近づいて、彼の首に手を触れ、胸の中に入った。

レオニードは、ゆっくり両手を彼女の背中に回す。

「怖くない？大丈夫かい？」

「うん。大丈夫。」

「口づけも？」

彼女は返事の代わりに自ら口づけた。短いキスだったが、その時の二人にはそれで充分だった。

「カーチャ…好きだよ。」

「レオ…。」

「実は、今日のこの薔薇は布製なんだ。こうして髪飾りにもなる。君へのプレゼントだ。」

彼は、彼女の髪に花を挿してやった。

「ありがとう、レオ…。」

お茶の後、レオニードは彼女と二人きりになった時も、彼女のあとからソファーに座り、静かに寄り添って手を握るに留めた。

「しばらくは、またこうしていよう。それにしても今日は大進展だ。僕は、キスまで時間がかかるものと覚悟していた。」

「レオ、貴方って本当に優しいのね。私、もっとずっと貴方といたい…。」

「ありがとう。僕を信じてくれるんだね。」



今日、話そうと思っていたのは、同期生同士で結ばれた二人の話だ。二人とも剣の腕は凄かった。ある時、女性のほうが怪我をして緊急手術するに至った。彼の話によると、その時に相手が女の人なのだと改めて気がついたのだそうだ。

でも、病院では家族以外の付き添いはできないと言われて、咄嗟に婚約者だと名乗った。意識が戻った彼女にそのことを詫び、左手薬指にキスした。…君にもこの意味はわかるね。」

「婚約の証…。」

「そうだ。それから彼は病室に通って、彼女の手を握って指を絡め続けた。彼女が動けないうちは、告白するのは卑怯だと考えたのだそうだ。

それが、退院間際になって彼女から、恋人の振りはもう止めて良いと言われ、彼は自分の気持ちを初めて打ち明けた。

その二人、もうすぐ結婚式を挙げる…。僕も、こうしていいかな？」

レオニードは、エカテリナの手に触れて指を絡めた。左手薬指に口づけもした。彼女は抵抗しなかった。

帰り際に彼は言った。

「今日は嬉しかったけど、これからは家の中で待っていてくれ。そのほうが僕も気が楽だ。」

「わかった。」

エカテリナも、彼が自分を心配してくれているのがわかっていた。

彼が訪ねるごとに、エカテリナの家族達は席を外すことが多くなった。エカテリナとレオニードに早く結婚してもらおう、というのが家族の暗黙の了解だったのだ。やがてレオニードは二階のリビングに案内されるようになり、二人はそこで静かに抱きしめ合う時間が多くなっていった。

そんな日々が半年も続いたろうか、あるとき彼女は俯いて言った。

「実はね、これは父達には言っていないのだけれど…。私が暴行されたのは、一度ではなかったの…。私は突然攫われて同じような女性たち数人と牢屋のような所に捕まった。そこに、小さな子供が連れて来られた。その子を救いたくて、私達は犯人達を挑発した…。あとは…想像つくでしょう…。それでも私を愛してくれる？」

胸の中にいる彼女が微かに震えているのが分かった。心の奥底に秘め続けるはずの辛い記憶を、彼女は自分に話してくれたのだ。

彼は話の内容から、ある事件を思い出した。記録には、被害者の国籍や名前は記載されていなかった。ウユニ側からは、各国の警察に被害者の情報は徹底的に伏せられて参考事例として送られたのである。

「グラーヴェランド事件…君はその時の被害者のひとりだったのか…。辛い思いをしたんだね。」

レオニードは心を決めた。彼女をきつく抱きしめる。

「君が本当に僕で良いのなら、僕は君を心から愛する。今話してくれたことだって、君が優しく正しいことの証じゃないか。そんな君と恋仲になれたことを、僕は誇りにさえ思うよ。…結婚しよう、カーチャ…。」

彼は諭すように囁いて、彼女の唇を吸った。

「レオ…。」

しばらく経って、エカテリナは彼の腕を掴んで、別の部屋の中に入って鍵をかけた。彼女の寝室のようだった。

「レオ、今ここで私を抱いて…。」

家族には、今日は夜まで帰ってこないでって頼んであるの。だから、しばらくは誰もいないわ。



実は今日はさっきの話のあと、もし貴方が去ってしまったら、そのまま一人きりで泣き続ける覚悟をしていたの。でも、貴方は逆にプロポーズしてくれた……。」

彼女は真っ直ぐに彼を見つめる。

「私、もうこれ以上は耐えられない……。貴方が私を気遣ってくれてるのはわかってる。でも、普通の男女なら、もう結ばれててもおかしくないわ。だから、変に遠慮しないで。レオ、貴方になら抱かれても怖くない……。きつと……。それに、これは結婚したら必ず通る道……。」

彼女は、自ら服を脱いだ。まだ陽の光が差している。胸を手で覆っていたが、逆光に映る彼女の曲線は美しかった。

「カーチャ、僕が悪かった。君に、そんな思いをさせていたなんて。……わかった。今、ここで互いの心をつつけ合おう！」

陽の光の中で二人は深く愛し合った。

それから間もなく、レオニードは、オルニアの両親に手紙を書いた。

父さん、母さん、お元気ですか。

僕は今度、エカテリナ・キッカワという女性と婚約しました。

彼女は、昔うちの近所に住んでいた、吉川歩ちゃんです。偶然にも彼女の家族はライラ
ンカに帰化していたのです。父さんは知ってましたか？

結婚式を挙げる予定ですが、父さんと母さんにも来て欲しいので、そちらの都合に合わせて
ます。日にちを教えてください。

レオニード

「あいつ、やっとその気になったか。」

父親の京一は、息子の結婚を喜んだ。

たしかに昔、近所に吉川という家族が住んでいて、そこのお父さんとは巡回中によく会っていた。あそこの娘さんのことはよくは覚えていないが……。

母親のサシャのほうが彼女のことをよく記憶していた。友達が少なかった息子と遊んでくれた、数少ない友達の
ことを、母として記憶していないわけがない。

「あの子は良い子だったわ。少し気が強かったけど。ふふっ……。」

一三. 祝福

レオニードとエカテリナの結婚式が行われたのは、その年の十一月二十八日である。

双方の家族は、実に二十年ぶりに顔を合わせた。

「やあ、これはこれは……。お久しぶりですな、吉川博士。」

口火を切ったのは、神崎京一だ。大人の顔はそう変わるものではない。髪の色が変わっていても、顔を見分け
るのは容易い。

「神崎さん、どうもご無沙汰いたしまして。うちの娘がお世話になります。今後ともよろしくお願ひします。」



「こちらこそ、息子のこと、どうかよろしく願います。しかし、この広い世界で、よくあの二人が再会できたものです。これも運命というものですかなあ。」

すぐ横では、母親同士が話をしていた。サシャとマリアだ。

「本当にお懐かしいですわ。こちらへ移って来るときに、いろいろ教えていただいたこと、今でも昨日のことのようです。坊ちゃんもたいそうご立派になられて。娘もすっかり頼りにしているようです。不束な娘でございますが、何卒よろしく願ひ致します。」

「恐れ入ります。こちらこそよろしく願ひ致します。お嬢様はお美しくて、うちの子には勿体ないくらいです。息子は、結婚後はそちら様にご厄介になるとか。本当に何を考えているのやら。ご面倒をおかけしますね。」

「いえ、それは私共の希望を坊ちゃんが聞いて下さったのです。私共家族は、まだ子離れができていないのかも知れませんね。下の子は小説家になるのだと言って、まだ同居しておりますし。」

「まあ、作家さんですか？羨ましいですわ。」

「作家とはいっても何を書いているのやら。親には見せてくれないんですよ。」……

と、まあこのようなやりとりをしていた。

京一は、何気なく端のほうの席に座っているクファシルを見つけて近づいた。隣には警護官とおぼしき人々が幾人か並んでいる。皆、レオニードとは同僚のはずであり、また恐らく王族たちの警護も兼ねて参列しているであろう。

「クファシル殿下。お久しぶりでございます。息子がお世話になっております。この度は、式にもお越し下さり、誠に光栄に存じます。もう少し目立つ席にいて下されば、もっと早くご挨拶に参りましたものを。」

「神崎警視、この度は、おめでとうございます。しかし私は、お宅のご子息を異国へ赴任させた張本人です。どうかお許し頂きたい。」

「何を仰います。そのお話は、前にも伺っているではありませんか。」

息子からもいろいろ伺っております。息子が今あるのは殿下と姫様のお陰……感謝こそすれ、謝られることは何もございません。本当にありがとうございます。」

エカテリナの弟イリヤは、会場となった宮廷警護課の建物があまりにも質素で実務的なことに驚いていた。ここは、たしかに宮廷の敷地内ではあるが、れっきとした役所の一部なのである。

(想像と実際とは、違うんだな……。)

彼は、自分の未熟さを恥じた。

やがてその時刻になった。レオニードとエカテリナ、立会人のアルティオ、アレクセイ、その妃のマリンが入ってくる。一同は三人の王族に敬意を表して一旦立ち上がる。マリンは、この時妊娠八ヶ月、お腹がかなり目立っていた。

アルティオが立会人として挨拶する。

「この度はおめでとう。二人は、長きに渡る空白を埋めつつ、ここに結ばれる。今後も、互いに寄り添い、様々な困難を乗り越えていって欲しい。ライランカ上帝アルティオ、この場にて君たちを心より祝福しよう！」



アレクセイがレオニードに指輪を渡す。

「おめでとう、レオ！ 幸せにな。」

「ありがとう。」

マリンはエカテリナに近づいて、指輪を渡す。この二人は、婚約の報告時にレオニードから引き合わされて会っていた。マリンはエカテリナのことをしっかりした人だと感じ、エカテリナはマリンを本当に可愛い人だと思った。

「お幸せに！ 彼を離しちゃ駄目よ。」

マリンは、はち切れんばかりの笑顔で言った。

「どうもありがとうございます。そして、どうか元気な赤ちゃんが産まれますように。心より願っております。」

エカテリナの笑顔も彼女に負けないくらい美しいものだった。こんなにたくさんの人々に祝福されて結婚できるなんて、想像もしていなかった…レオ、貴方と会うまでは…。

「ありがとう。」マリンの声が聞こえる。

指輪を互いに相手の指にはめ、誓いのキスを交わす。会場から拍手が湧き起こった。ここに、また一組の夫婦が誕生したのである。

と、その時だ。天井から無数の花びらがサラサラと舞い降りてきた。

「これは？ …」

一同は顔を見合わせた。

「レオ、カーチャ、結婚おめでとう。お幸せにね。…私は守護精霊テティス…。」

「驚いたな。テティスが結婚式に花びらを降らせて祝福したという話など聞いたことがない。」

アルティオが感動して言った。長年皇帝を務めたアルティオ上帝でさえも知らないということか…。その場の者は皆一様に驚いた。アルティオは態勢を立て直して言った。

「君たち二人は、テティスによほど気に入られたらしいね。名誉なことだぞ。本当に幸せになるんだ。いいね。」

その夜、二人はアレクセイの許可を得て、テティス湖に向かった。彼女に花びらのお礼を言うことと、その理由を聞くためだ。

帰化礼の時と同じように霧が湖を覆い、テティスが姿を見せた。

「レオ、カーチャ、よく来てくれましたね。」

レオニードが尋ねる。

「テティス、昼間はどうもありがとうございました。そのお礼を言いに来ました。でも、何故あのようなことを？ 王族でもない僕たちのために…。」

テティスは、二人を見つめて、こう言った。

「私は、守護精霊といわれながら、あの時カーチャを守れませんでした。そのことをずっと悔いていたのです。私が眠っている間に、あの男は貴女を私の力が及ばないウユニまで連れて行って犯してしまった…。」

あの男は人買いの一味で、女の子達を攫っては売り飛ばしていたのです。一味は全員、その数日後にウユニ警察に逮捕され、全ての能力と記憶を剥奪されました。魚に変えられ、聖獣クラーケンの餌として供されたのです。そして聖獣クラーケンの魂は、決して変容することはありません。



惑星市民条約機構では死刑を禁じていますが、姿を変えて他の生命体の栄養素になることは、この範疇には含まれないはずで。

いずれにしても、カーチャ、貴女に危害を加えた者たちはもう二度と現れないことになります。」

二人はただただ驚くばかりだった。能力と記憶を剥奪？ 聖獣クラーケン？

「レオ…話はカーチャから聞いていますね。貴方は誇るべき人を娶ったのよ。そして、貴方なら、きっとカーチャを幸せにできる。」

カーチャ、貴女の心はこの上なく尊いものよ。私は貴女たちに最大の祝福を贈ります。それに、これからは貴女の傍にはレオがいる。幸せになるのですよ。」

精霊は姿を消し、再び天から花びらが降ってきた。

「カーチャ…本当に幸せになろう。僕がついてる。」

「うん、貴方となら、愛し合える…。」

舞い散る花びらを浴びながら、二人は帰った。

一四. 櫛の広場

五年後の晩秋の朝である。今朝もクファシルは日課のジョギングで宮殿近くの森を走っていた。何年か前にファイーナと星祭りの夜を過ごした、あの森である。

(ファーニャ、君と過ごしたこの森を、僕は毎朝走っているよ…。)

だが、彼女が『櫛の広場』と呼んでいた場所は、敢えて避けていた。そこは毎朝走るにはあまりにも思い出が大きすぎたのだ。

その朝はとりわけ霧が深かった。彼は慣れた道から逸れていることに気が付かなかった。霧が晴れかけた時に、彼は自分が普段とは違うところを走っていることを知った。見覚えのあるその場所は…

『櫛の広場』！

ファイーナとの思い出が彼を押しつぶす。彼の意識は、そこで絶えた…。

その頃、アレクセイとマリンのあいだには、二人の女の子が生まれていた。名前は、フローラとオリガ。

「んー、よしよし…いい子だ。」

その朝、アレクセイは、生まれて五ヶ月のオリガをあやしていた。自分が父親になるとは…こんなに可愛く思うとは、想像もしていなかった…。

マリんとフローラは、並んでぐっすり眠っている。

この子たちもやがては成長していく。そして、おそらくフローラが将来の皇帝になる…。良い子に育てなければ。マリンのように親しみやすく、ファイーナ姫のように優しく…。

そんなことを考えていると、宮廷医のウラジミルとナディアが何やら慌てて駆け込んできた。

「皇帝陛下、大変なことが…。姫様たちは、妻がお預かりしますので、とにかく医務室までお越し下さい！」

「どうした?!」

嫌な予感がした。



「クファシル殿下が…お亡くなりになりました。…」

「何?! どうした? 何があったんだ?!」

彼は狼狽した。昨日まで何事もなかったではないか!

アレクセイは、赤ん坊をナディアに預けると、医務室まで走った。ウラジミルも後を追う。

医務室では、多くの看護師たちがひとつのベッドを取り囲み、アルティオやレオニードもついていて、涙を流している。

「アリオージャ…。クファシルが、死んでしまった…。」

アレクセイは、放心状態でベッドに近づいた。静かに横たわるクファシルの姿が、そこにあった。

「今朝、森の中で倒れられていたところを、警護官が発見しました。その時にはもう…。」

ウラジミルが話した。

アレクセイは、冷たくなったクファシルに触れ、抱きついて泣いた。

「兄上…。加賀警視正…。」

クファシルの体は人ひとりで運ぶには重そうだったが、アレクセイは湖まで一人で運ぶと言って聞かなかった。

「おい、アリオージャ! 僕もいるんだぞ! 警察学校の仲間を忘れたか!」

レオニードはアレクセイの胸ぐらを掴んで怒鳴った。友の叫びが頑なになっていたアレクセイの心を揺さぶった。

「レオ…。そうだったな。すまん。…」

クファシルの体は、アレクセイとレオニードの二人が担架に乗せてテティス湖に葬ることになった。

「アレクセイとレオニードは、ファイーナとクファシルが選んで連れてきた。さぞかし辛いであろう。彼らの好きにさせてやってくれ。」

アルティオはそう言い残すと、自分も少し遅れて湖についていった。

湖にはまた霧が垂れ込める。アレクセイとレオニードは、クファシルの体を担架から下ろして湖面に横たえた。

アレクセイが語りかける。

「加賀警視正…今まで、本当にありがとうございました。貴方は、僕にとって目標そのものでした。…この期に及んで、加賀警視正なんて呼ぶのはおかしいですよ。でも、貴方はいつまでも警察学校にいた時の、凜として制服を纏っていた、優しさを内に秘めた加賀警視正のままなのです。

僕は、姫を貴方に託して良かったと、心から思っています。どうか姫の元に帰って差し上げて下さい。…」

レオニードも冷たくなったクファシルに話しかけた。

「加賀警視正…これまでどうもありがとうございました。貴方は常に冷静で、全てを優しく包み込んでくれました。僕も将来、貴方のようになりたいです。お疲れさまでした。どうか安らかにお休み下さい…。」

クファシルの体は、湖面を滑るようにして見えなくなった。

「レオ…君は僕が姫に憧れていたと聞いても驚かないのか…。」

アレクセイが呟く。



「ああ、前から知っていた。ここに来る船の中で、君は珍しく酔いつぶれた。その時にな。」

「そうだったのか……。僕はお二人の幸せをどうしても見届けたかった……。それももう終わったんだな……。」

後から来たアルティオは、この二人の言葉を聞いた。

謙虚を絵に描いたようなアレクセイという男が、皇太子の重責を引き受けたのも、なかなか妃を探そうとしなかったのも、そのような理由からであったか……。今にして思い当たる。

クファシル、君は私にとっても、本当の息子であり、またどこかで補佐役のライブラのままだったよ。

君は、心からファーニヤを愛してくれた。ファーニヤとアレクセイを懸命に支え続けてくれた。ありがとう、そして永遠にファーニヤと共に眠れ……。

アルティオは、アレクセイたちの言葉は聞かなかったふりをして、彼らに近づいた。

「アリオージャ、レオ……。クファシルはよくやってくれた。きっと今頃はファーニヤと再会しているだろう……。皆が待っている。帰ろう。」

環境局長官のイリーナがクファシルの死を知ったのは、さらにその二時間後、出仕したときである。

「そんな……。兄上……。」

彼女もまた、泣き崩れた。

彼女こそが、クファシルの本当の妹だった。同じように環境設計家ヴィクトル・ルマールによって、子供の頃から一緒に育てられ、ライランカに送り込まれた補佐役・カーサル……。それが彼女の元々の姿だ。

血の繋がりはなくとも、数年に一度しか会えずとも、世界各国に散った七人は互いにきょうだいであった。絆は深い。

彼女は、他の五人に直ぐさま電報を打った。

「ライブラ シス カーサル」

ライブラ、加賀篤史、クファシル……。生涯で三つの名を持つことになった一人の男は、こうして湖に消えていった。享年五十……。

運命は、こうして生命を生み出し、また消してゆく。人は、その中で懸命に生きているのだ……。

一五. グラーヴェランド事件

ウユニは、極南の大陸にある。

その事件のことは、数年が過ぎた現在においても『グラーヴェランド事件』として国全体の汚点となっている。

ウユニ国民の多くは、何らかの超能力者である。未来を見たり、惑星全体を揺るがすような大きなことはできないが、その力は決して侮れない。事件は、その最たるものだった。……

そもそも、それまでは細々と続いていたマフィアの中に、強大な精神バリアを張ることができるグラーヴェという男が入ったことが、事件を大きくした要因だった。



つまり、悪事を画策しても、外からは見えなくなってしまったのである。また、そのこと自体が知られぬまま放置されることにもなっていた。

グラウヴェを武器に加えた十人ほどの一味は、やがて国の内外を問わず多くの金品を奪い、人をさらい始めた。警察がこの事実を察知し動き始めたときにはかなりの数の被害者が出ていた。

ライランカのエカテリナもその一人だ。彼女は何の前触れもなく突然見知らぬ場所にテレポートされた。乱暴され、牢のようなところに閉じ込められた。そこには、同じようにされたらしい女性たちが数人いた。皆、服を剥ぎ取られている。おそらくは、そうして逃げられないようにしてから売り飛ばすのであろう……。

数日後、まだ五、六歳くらいの子供が来た時も、奴らはやはり暴行しようとした。それをエカテリナは食い止めた。

「あんたら、そんなガキしかいたぶれないなんて、そんなにアソコが小さいのかい！ いっちょ前の男なら大人を相手にしな！ この臆病者が！ ライランカ人のほうがよっぽど珍しいだろ？ ほら、この髪！」

彼女は、本で読んだ『ヤクザな跳ねっ返り』役を演じた。私はもうやられてしまったんだ。何度やられようと変わりはしない。だけど、その子はまだ間に合う……。

「おお、姉ちゃん、いい度胸だなあ。跳ねっ返りほど抱きたくなるぜ。ほいじゃ、その分うーんと楽しませてもらおっかなあ！」男たちが近づいてきて、牢の鍵を開けた。

「そんなら、あたいも抱くがいい！」

同じく牢にいた茶髪の女性が叫んだ。彼女だけではない、他にも何人もの声が聞こえた。

「おい、てめえら、多少は大目に見てやるがやり過ぎるなよ！ そいつらも売り物なんだからな！」

毒々しい男の声も耳に入った。

そのあとのことは官能と苦しみ以外、よく覚えていない。気がついたとき、彼女のそばではその子が抱きついていて泣き、他の女性たちが身を寄せ合って彼女を暖めてくれていた……。

しかし幸いにして、エカテリナたちの悪夢は数日で終わった。

一味の一人が人を攫う現場に、たまたま非番の警察官が居合わせて、跡をつけたのである。その警察官、名をストラと言い、類い希なる能力を幾つも持つ凄腕の警部だった。

(いい度胸してるじゃねえか。このストラの前で、人さらいとは片腹痛い！)

彼は初めそう軽く考えていた。跡を付けて、ねぐらを特定、人手を揃えてから突入し、人質を解放する、それがいつものやり方だった。

しかし、その人影は追跡の途中で忽然と姿を消した。辺りの気配をより広く探ってみても、それらしき犯罪感が感じられなかったのである。

おかしい……。何らかの痕跡が感じられるはずだが。悪意や被害者の叫びが、全く感じられないとは。

ストラは、直ぐにそのことを上司のカニシヨ又警視正に報告した。その時もやはりテレパシーである。

「確かにそれはおかしいな。被害者がいる限り、何らかの痕跡が残るはずだ。ベテランの君にもわからんとは。とりあえず現在位置の情報をくれ。こちらでも検討する。」

「わかりました。」



ウユニ警察では、このようにして捜査を進める。各個人が持つ能力を駆使して事件を収めるのだ。防犯率と検挙率から言えば、もしかしたら世界一かも知れない。

なかでも、ストラは捜査能力に長けていた。その彼が犯罪感を察知できない…これは尋常ではないと考えられる。

ウユニ警察局長のダツタンゲ長官は、早急に警察幹部を集めた。

地理を熟知する者マントラ、心理を読むモクレンビ、指揮力一番と謳われるフドウクータが率いる特殊部隊の面々だ。そして、当該地域をくまなく搜索したが成果はなかった。かといって、事態は一刻の猶予も許されぬ。こうしている間にも被害者が何をされているか、わかったものではないのだ。

ダツタンゲ長官は、この事態をオンネト帝に報告した。皇帝は、しばらく考えてから、環境局長官を呼び出した。その名はムーム…ヴィクトル・ルマルの忘れ形見だった。

「陛下、何故ムーム長官をお呼びになるのです？環境局は、犯罪とは関わりのない部署ではありませんか。」

「実は、彼女は我が国全体の参謀なのだ。この一件、おそらく短期頭脳戦となろう。こちらも全力を尽くす。もはや隠し立てしている時ではない！我々は何としても奴らに負けるわけにはいかぬのだ！」

「参謀…。」

ムームがやって来た。皆から一件の詳細を聞いた彼女はこう言った。

「もし私が頭目だったら、ねぐらは何カ所かに分けます。そして定期的に変える。その候補としては…。」

彼女は地図で五カ所を差した。環境設計学は、こういう所にも威力を発揮する。

「港町の近くで人目につかぬここ、山に囲まれたこの辺り一帯、多くの金脈に恵まれたこの村と、大きな市が立つこの都市、あるいは…この時間城の地下深くの地点…です。」

「何ですと！まさか！」ダツタンゲは耳を疑った。

「そう。誰も思わぬ場所…それが狙い目です。」

これらの付近を重点的に、今度は『気配がはっきりしていて、ここではない』というところを候補から外していただきます。必ず『空白』ができるはずですよ。それが私たちが行くべき場所です。」

「なるほど…消去法ですか。やってみる価値はありますな。」

搜索は実行された。空白を探せ！

果たして、その『空白』は、港町アンダンテと、時間城の地下二十メートルの深さにあった。

その二カ所に、一気に特殊部隊が突入した。時刻はちょうど午後三時、夜働きをする者にとっては昼寝の時間帯である。虚を突かれた一味は、あっという間にテレキネシスで金縛りにされて拘置所にテレポートされた。中でもグラウヴェを最初に抑えられてしまった一味は、もう手も足も出なかった。

捕まっていた被害者たちは、城の中で手厚く介抱された。オンネト帝は自ら被害者の元に出向き、深々と頭を下げた。それぞれを家まで送り届け、家族にも謝った。外国人の被害者に対してもそれは変わらず、自らの船で送り届けた。

ここで特筆すべきは、やはりライランカのエカテリナの場合であろう。



